WASON
HQ
1104
J74+

THE WOMAN'S MAGAZINE

No 18 20

明治二十年十一月五日刊行

毎土曜日發兌
一冊正價五錢
府内無郵送税

女學雜誌

第八十三號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 83. NOVEMBER 5TH, 1887.

第八十三號

EDITORIAL:—On the Novel: No. II.—On what point to judge Novels?

LEADING ARTICLES:—Study of Temperament before Marriage.

MISCELLANIES:—Delicate Feelings required in Women; A Letter to Wife; Treatment of Child.

BIOGRAPHIES:—A Soldier's Relieve (Concluded); Madam Necker.

NOVEL:—"Fragrant Rose": No. XVI.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

●社説　小説論第二（小説の善惡を批評する標準の事）

●論説　合性論

●叢話　はづかしと云ふ事〇小野寺十内より妻に送りたる書狀〇子供の育て草

●佳傳　少妹兄の命を請ふ事（其二）〇チッケル夫人の傳

●小説　薔薇の香第十六回

●寄書　父母干渉論（小林一枝）淑女以文會餘響（鳥居忱）

●雜報　二十件

●珊瑚の珠　（第四十二回）

〇立志篇の著者スマイルス曰く女子を教育するは即はち男子を教育するとあり女子の品性を高尚にするは即はち亦た男子の品性を高尚にするにあり女子の心裡の自由を擴張するは即はち全社會の自由を擴張し安固にすると也蓋し國民とは只だ一家族より出現したるものにして其實皆な母たるもの丶子供に過ぎざるもの也

〇博物學者ジョンレッドヤルド曰く吾れ諸國の人民を取調ぶるに何處に於ても女子は常に男子より多く飾れり

〇詩人ムール歌を作つて曰く吾が歩む路は悉く是れ女子の導きに由る熱帶の地熱炎々たるか極方の地寒凛々たるか而も此にもし女子あらは即ち此に幸福あらん

〇生母にあらずして子を養育する母をまゝ母と云ひ生子にあらずして養育を受る子をまゝ子と云ふまゝは養育の義にて小兒に乳を飲付する今の乳母の事なり之を古へ乳付けとす東鑑に武衛（頼朝卿の事）乳付けの靑女を召さる摩々と號すとあるにて知るべし之れより轉稱して小兒の乳を飲むをまゝと云ひ今にては小兒の飲むを喫するともまゝと云ふにはありしなり（遊廬雨筆）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第八十三號

明治二十年十一月五日

● 社説

○小説論

（第二）小説の善惡を批評する標準の事

世上の道德論者往々小說を讀むの不德を掛念して少年子弟を戒しむるの敎を爲せるものすら之れ在る處ろ取分け小說を好み隨ては亦特に其弊に陷り易しと云ふ女流に對し吾人は何故に之を戒しむることを爲ざる乎、啻に之を戒しめざるのみならず前篇の語氣たま〳〵以て女流に小說を讀むことを勸告するの傾むきあり甚だ以て奇怪なることと承知さるゝ人も大方は之れなきに非ざるべし。然れども吾人の考ふる所に依れば小說を讀むの事必しも左樣に不德不義の處置にあらず若し見るべきの目を以て之を觀味ふべきの心を以て之を味へば反つて之れ之を嗜むが爲に害を蒙むること尤も少くして爲に益を受ること甚だ多かるべしと思はるゝなり、故に今の女流に對して吾人が勸告せんと欲する所のものは固より何事をも掛念せず小說を讀むべしと云へるにあらず亦何事に係らず全く小說を讀む勿れと云へるにもあらず必竟小說を批評するの標準及び小說を讀むの覺悟に付て先づ心に數條の規則を承知するを要すと申すことに在る也。

扨ては第一、小說として如何なる小說をか之を立優つたるものと許すべきと云ふに或人は趣向の面白きに在りと云ひ或人は文章の立派なるに在りと云ひ或人は亦た全體に勸善懲惡の趣を示し人を導ひて英雄とし善人とし美人とし貞婦と爲し得るが如きを以て其上乘を得たるものと爲せり、然るに深く小說なるものゝ發達を考ふるに如此きは何れも皆な良好の小說には欠く可らざる一二の大切なる性質たらんこと勿論なりと雖ども此等を以て直ちに良好の小說に尤も緊要なる性質を盡せりとは見做すべからざるが如し、凡そ學問世界の歷史を顧みるに最初に妄想的の哲學行なはれて後に實驗的の理學行はれ最初一心を議論の基ひとして後に天地宇宙の實相を觀するを以て務めとすることゝ相成れるが如く小說も亦た遂には只だ世間に實在する實際のまゝを巧みに寫し出すを以て上乘に達したるものと心得るの時に至ることならん。左れば昔しは作者が狹き頭腦の中に一つの舞臺を仕調らへ此内に善者惡人兩樣の人物を造り出し之を色々に躍らせ働かせて遂に自分が万能の裁判を掌さどり惡人果して罪を受け善者果して御褒美にあひ

目出たくめでたき最后に至つて事了れりと云ふ而して其間に親を殺ろさるゝものあり反り撃に會へるものあり敵打に巡禮するものあり寶刀を失ふものあり勘當を受るものあり出奔するもの斷落するもの苦勞するもの榮燿するもの千變万化突乎として地に沒し突乎として天に登る複雜至極の道行あれども扨て此の舞臺に躍り出る人物は悉く此の作者の意想に成り亦た其人物が種々雜多に立働く運動は悉く此作者の工夫に成るあり、故に此類の小説を讀むものは此の小説何如に才子名家の趣向に成るものと雖ども要する所ろ其人の一種の妄想を承まわるに過ぎず最初の人民こそ之をバ好みたれ亦た文學に暗らき人々こそ尙ほ之を好みとすれ苟しくも高等の地位に進みたらん程のものには斯る種類の小説は少しも面白味のあきものと知るべし。左れば小説家のうち其才の彌よ進歩したるものは彌よ勉めて自分の妄想を去り只管ら世間に有觸れたる實際の有の儘を寫し出さんとを勉むるが如し、古來より小説の追々と變遷し來りたる跡を考ふるも亦た初めは趣向を尊みて今は專ら實際の世情人情を寫し出さんとを主とするの傾むきとなれり、又た多く小説を讀みたるものは趣向に感ずると甚だ少なく其趣の實際に適するの故を以て大に感心し小説を見るの目の肥えたるものは皆な架空構造迚ても人生に在るましき事柄を以て充滿する小説をバ甚だしく忌み嫌ふとなり、以上三つの事を要するに則ち小説の進化のあと亦た哲學理學の發達と同様にして決局此の自然の有樣に隨ひて自然の有のまゝを寫すの外最良の策なきとを示すに至て止むべきものと思はれたり、之を以て試みに西洋近代の小説大家が作りたる名著を讀むに全篇の趣向道行あるものは極めて淡泊なり其外部の變遷變化も亦極めて多からず一言すれば某紳士が某孃と約束して遂に結婚するに至ると云ふか或は不幸にして此の事成就せざりしと云ふか又或は之が爲めに種々の失策を爲せりと云ふか大躰の主旨とする所ろ略ぼ此類の事を出でずと雖ども此の淡泊なる道行、變化少なき出來事、の間に人の心中に起り來り起り去るべき心思の微を分ち人情の極を穿ち泣かざるの涙言はざるの怨をも胸頭に打懸けたる鋭の手立によつて明白子細に寫し出し讀むものをして然り／＼と默頭かせ我も嘗ては左樣の事ありき亦此後或は此の如きとあらん世間には此類の人あり此時には必らず如此く處置するとあらんと思へせ吾は恰かも小説書中の小世界に出でゝ書中の人物が實際に運動する傍らに立ち靜かに之を見物する歟の如き思ひあらし

むるに至るものあり、蓋し如此して初めて高等ある小說の品格を得たるものと云ふべし、然るに桃太郎の征伐は言も愚か八つの犬十の杉が急に進化して人間に生れ代る如き或は一人にして數十人力の大力を有し勝手氣儘に人を制し或は乍ち百人に敵すべき剛の勇士と爲つて劍擊急に神に入り至る所ろとして相手なきものとなれると云ふが如き初めて聞くときは眞とに活潑快絕の如しと云へども久しうして其愚らしきとを發見し迚ても高等の小說として愛讀すべきものにあらざるを知るべき也、故に作り物は人情本に及ばず稗史は所云る小說に及ばず八犬傳弓張月は遺憾ながら源氏物語淨瑠璃物語等に及ばざる也」之を以て小說を批評するの標準には先づ其の實際に合へりや否やの一ヶ條を第一に置くべし即ハち斯る道行は人世に在り得べきものか斯る人情は實際に有り得べきもの乎又たかゝる出來事に際して人間の心は果して此の樣に働らき此の樣の變遷の后には人品も亦此の如く變化するものなりや等凡そ實際の世情人情と相違する所なきや否やを吟味するを最初と爲し彼の趣向の如き文章の如き勸懲の寓意の如きは何れも之を第二位に置て小說を批評するの標準となさゞる可らざるもの也。

●論說

○合性論

女學雜誌編者　演述　竹中松三　筆記

玆に行儀正しく心得方の素直なる人があると致しませう人も大層之を賞めまして評判が餘程よろしひ誰れも孰れも之と近附きに成りたいと思ふ程であると申します、左樣ならば私も喜んで之と交際いたすとでありませうが扨て之と交つて見まするに成程其の品行身持は申分ない感心な人である、と箇樣に自分で悟りましても未だ心が互ひに打解けないゆへか何分上下を着て元日の祝詞を述ぶるような氣分が爲て朋友たる上の樂しみは倚ほ足らないように思はれる、然るに此の後ち二度三度と度々之と話しも爲て見たが何分どこか氣の合はん所が在つてどうも十分に安心して氣樂に交ることが出來ないと云ふ事があるです。然し之に反對して玆に人のうはさも隨分宜しからず世間で兎や角と評判される程ある人があると致ませう私等は無論好んで此樣なる人と交際を致とはありませんが若も何かの都合が在て偶ま之と近附になるとがあると致しませう其時成程あれが惡るいは此れが例の僻であると自分に承知しながらも倚ほどこか棄てがたひと思はるゝような心持が爲

て初めより左程つよく之を退けません、すると先方でも又た同じ思ひがあるかして私供へ大層打明けて何かの話をいたす其内によく〳〵注意して見ますると他人へは氣儘勝手の事を言ふ所の人であるが自分へは大層信切に交際さるゝようである、まんざらの人でないと思ふ心がだん〳〵に增長し早や三四度の面會にて乍ち舊識の如き親密の間柄となります最早互ひに掛念するともなく氣樂に安心して雙方の秘密をも話し合ふと云ふ極めて愉快なる朋友となる事があるです。以上二つの例へは假りに設けましたる所の話しではありまするが實際此のようなる事は誰も彼も多少經驗する所であります、彼の女學校の生徒方が新に入校して未だ一日か二日も立ちませんうちに早や七八十人もあるうちより乍ち一人の仲よしを見付け學校の上り下りは固より一所で甚しきは衣物を一つにそろへたいと云つて家のお母樣におねだりをなさつたり又束髮のかんざしを一つに仕度といつて同じ品を注文を爲さる如きは每々見聞するとでありまするが此の生徒の方は其くせ一二年も同じ級に在て每日一所に同樣の書物を讀む所の仲間のうちに反つて之れほどの仲好はないと云ふの次第もあるです。扨て右ようの事は世の中に數多實例のあるとでありますが之は即ち合性と云ふ者の合ふと合ざるとに由つて斯る面白い結果が起るものであります、故に合性が合へば胡越の人も乍ち同鄉の人の如く思はれ、合性が合ざればアイノが朝鮮人に面會したようなる心持がいたすものであるです。

シテ此の合性の事は人間交際の上に取つて餘程注意しなければならん事でありまするが、取分け夫婦と爲つて一家を持つところの男女の方々には言語に盡されんほどの大切なる關係のあるものであります、若しも此の合性が能く合ひませんならば定めし磨木磨鉢も追つて出現するでありませう時には又た山の神いくぢなしの討論會が相初まるともありませう甚た苦々しい事でありますが、よし幸ひにしてかゝる苦々しい下賤なる不和はありませんとと致しても若し合性が十分に合ひませんならば一家内に最上の幸福和樂と申すものが決して無いです、即ち互に喧嘩もいたしますまい互ひに爭論もいたしますまい先づ一家よく和合したと申して差支へないほどの場合にも相違するとでありませう、が然し一家の和樂夫婦の幸福と申すものは決して之だけでは十分と申されません此上に倘ほ一層のたのしみが在つて夫は妻と談話すれば憂欝も知らず識らず散じて行くと申すようになり妻は夫の傍らにさへ在

らば大磐石の上に眠るように思はるゝと云ふ平和氣樂ゆくわい至極のたのしみが無くては成らん、然るに合性のよく合はん所の夫婦は成程双方のたしなみによつて互ひに能く身をつゝしみ妻は夫にハイ〳〵と云ひ夫は妻にソウ〳〵と申して居りませうとも終日双方で勤め合うような心持が爲て何處かに氣兼苦勞をなし甚しきは辛棒をして居ると諺にも云ふようなる有樣でありましたらば、之こそ既にホーム即はち家族と云へるものゝ味を得たるものではありますまい。此の元因もしも合性の合ふと合はざるヿに由ると申すならば合性論の關係する所ろは實に淺からんものと思はれるです。

故に最初結縁を爲さるゝ前に先づ篤と双方の氣性を見拔き彼此の合性はよく適合するか否やを吟味するヿが甚だ大切である、と云つて私は何も暴りに自由結婚をすゝめ今の世の中で年若な男女が銘々の見識で此の合性を研窮なさいと申すのではない、好し兩親後見人が此の結婚の事について尤も勢力あるものと爲つて居るとしても、どうか此の兩親後見人たる人が先づ第一に此の合性と云ふヿに心をとめて下さるように致したいと云ふヿである。彼の先方の血すじはどうで其地位身分は何如であると云へる如きヿは吾々が申すまでもなく親も世話人も當人もよく〳〵注意してせんさく致しまするが獨り此の合性と云ふヿに至つて毫も頓着を爲ないは實に歎かはしきヿである私は常々申して居るヿである。成程先方の血すじも善く身分地位も申分なく學文もあり利口であると云はゞ眞に欠け目のない縁談であるように思はれませうが人生の幸福は決して學文才智又は地位家柄等を以て成立つものではない、故に其子の爲めを思ふて此ならば最良の縁なりと考へて約束を爲されたりとも此に一つ双方の合性が適はん爲めに一生不愉快に暮らすようなるヿが在りましたらば先に心配してさがし當てたる浮世の事情は毫も之に効能のない者となるでありませう。故に御兩親後見人等はどうか縁談の節いつも双方の合性はどうかと云ふヿに常々掛念さるゝようにいたしたいが又た當のお二人もそうである、あの方は評判も善い學文もある辨口も立つ大層やさしひ信切であるなんぞと申しました所が之は必らずしも自分と尤も性の合うべき性質なりとも定められません、必らず其道によつて合性の適否を考へ又たむし蝕ひさびくさるべき浮世の寶を賴まず翌日爐に投げ入れらるべき墓なき名望地位を心とせず双方の意氣投合して一生の伴侶となしさしつかへの無いものを撰むヿが尤も大切の事

でありませう。

然らば合性なるものは何如に致したらば分りませう之れが困難なる問題であるです、昔しの人は三世相を繰つて見て乍ち判斷した、誰々は土の性でお前は金の性である、だから辛棒を爲さい急度初めは惡くつても後が善いよそれ御覽こんなに福々として仕合はせが在るでせうと樂隱居の繪圖を示します、すると頑固の親父も納得し當人も喜んで實際は眞に惡縁であると出雲の神はお笑ひなさる所へも參るです。然し之れは未だ宜しひとしても時として先方が火の性でお前は水だ迚ても和合覺束ないのみか家内雙方滅亡の基ひであるからと云つて何如ほどに好い口であつても中々承知しない例令ひ當人同士は眞にそろつた妙伉儷となられる丶人であつても之を構はないたゞ此の大々不吉と云ふ差し示しに從つて乍ち縁談を退くると云ふ實に笑ふべきことも在つたと存じますが、今日文明の世と相成ましてはどうも此の三世相の合性論は感服することが出來ないです。然し之は支那日本の迷ひであつて西洋ではモー少し確かとしたる説が昔しから行はれて居ました、第一希臘の醫父で紀元前四百年の頃の生理學者ヒッポクラテスと云ふ人が人間の氣性を四つに分けましたが其後ちパウラスエーギナタと云ふ人が出て參つて此のヒッポクラテスの説を祖述いたし、其後追々と色々の議論を考へたる人もありましたるが、近代の博士グレゴリーに至つて改めて人間の氣性を五つに分けた、然るにカルレン氏は之を二つに縮めた、其外博士ゴール又其の相手たる博士スパーズハイムなども隨分此論を研窮し特に博士パウエル氏の如き殆んど二十五年の間だも合性の事を吟味したと申すことであります。

扨て斯の如く數多の學者が熱心に研窮いたしたる結果として今日どれ程の事が相分つたかと申しまするど、即はち先づ人の氣性を或は二つ或は四つ或は五つに分けて之を活潑とか憂鬱とか神經質とか沈靜とか云つてそれ〳〵相應なる名前を附けました、シテ活潑なる氣性と云はれる人は顔色が斯うで髮の毛がカウ目の色が何々で樣姿が斯のようだと明らかに定めて置き扨て何某は何んと云ふ氣性の部類に入るべきものだときめる、而して憂鬱なものは活潑な人と合性がよろしひとか神經質の人は沈靜の人と性が適合するとか云ふように申すことであります。

それゆへ此の合性論を信ずる所の人は數多の面白ろい例を引いて自分の説を確しかめるです、昔し某と云ふ此仲間の學者

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

が或る所に參つて話しを致しました時戯れに當家の主人の妹に向ひ私はあなたのお愛しなさる人を當てゝ見ませう、先づ血色が好くつて髮の毛が黑く大層活潑で肉の中位の人でありませうと申しましたらば此の妹顏を赤くして主人公即ハちその人の兄に向つて怨めしそうな目じりを送つた、之は此の兄が自分の秘密を悉く此の客人に話して仕舞つたと邪推を致しました程にも、此の學者の推察が能く當つた、と云ふのは即ハち合性論理の効能で其實は學者が當座に妹の氣性を見て此の氣性に適するものはかう〳〵云ふ人だと早くも合點して戯れたるところが、學理の妙神に達したと申さうか、即ハち能く其のまとに中つたことである。トかような實例を證據として合性論を主張しましたり又た昔しナポレヲンが第一の皇后を離緣するに至つたは双方の合性が合なかつたからだ、ワシントンの夫婦が間柄のよろしかつたは即はち何々の合性であつたからだと鏡を見る如く明白に其の理由を解き明かすことであります。然し若しも此の論題が左樣に明白でありませうならバ人生の幸福之に越したることは無い筈であるから世間には斯く迄で申しましたらバ左らバ今ま玆に其論理の大畧を申したが善いと促がされも爲さりませう歟、之に付ては私も少々の意見が在ることであるから追て改めて考ふる所を相述ぶることと致しませう。

●畵學を習ふ時の心得　　松井昇

巖本君女子に畵學を教授するの必要を主張し吾誌に時々此點の事に關し說話を寄せんことを促さる依りて先づ普通の女學校に於て畵學を修むる一般の心得方を記して其序となし尙ほ追々愚考する所を記さんと欲す

扨此の談話を分て三となし其第一ハ普通敎育の一として圖畫を學ぶの効用第二ハ圖畫學の敎場にあつて生徒たるものゝ注意第三ハ卒業後に着手さるゝ所の臨畫の順序等となすべし而して玆には其大略をのみ述ぶべし其細き事に至つては漸次敎師に就て學ばれんことを望むなり

本邦に在ても古昔より繪畫の道大に開け名家輩出し彼の土佐、狩野等の如く各一の流派を起し今日に及ぶものあり其間多少の盛衰ありと雖も亦世の進化に相伴ふて繪事上の進歩あるを見るに足るものあり其種類も亦尠なしとせず然れば其目的とする所多く裝飾の部に屬し單に美術の上より之を論ずれば大に觀るべきものある論なしと雖も所謂實用の上より之れを見れば甚だ適せざる所あるが如し晩近歐米の學術日に月に隆盛に趣き從て學校の教科目も益々多きを加へ圖畫も亦其一に列したり然れども慣習の久しき畵を以て學問の一に置き之れを學ぶは殆ど無用の如く思惟し現に學校長が科目の中に之を加へ若干の給料を以て教員を雇ひながら其教員もし熱心に圖畫を奬勵するときは却て忠告を受くる等の奇談もあり從て生徒たるものも圖畫の教場に入れば新聞を讀むあり雜談なすあり又他の學科を復習するものあり只二三の生徒生來畵を好むものありて僅に教授を受くるに過ぎざるが如き事實は近年に至るまで往々に見る所なりき

然れども最早今日に在ては右に述ぶる如き不都合は非ざるが如し蓋し圖畫の世に必用なることは今や教師は勿論之れを學ぶ人に在ても既に會得せしならんと雖も大抵其學び得たる圖畫を以て後日直ちに用立てんとの望のみにして之を學び得たるが爲め不識〳〵間接に利益あるを知らざる者の如し之を物に例ふるに食物は單に空腹を滿すに過ぎずとなし爲に大に人身を養ふの益あるを知らざると一斑なり是れ未だ奬勵の道の到らざるに由ると思わる

抑も畵を學で得る所の無形の効能は其及ぶ所固より男女に論なしと雖も予は特に其女流に適する所あるを信ず

即ち玆に間接に得る所の功用にして重要なる條目を揭げ聊か其適する所以のものを論ぜんに第一視察力を鋭敏にすること第二風致を研くこと第三綿密の性を起すこと第四想像力を培養することと等なり又直接の功用に在つては思想を通ずるに欠くべからざることと及び後來の事業に便にすること等にして其間又自ら手腕の運用を自在にすることを習練するをうるの得あらん

思ふに普通の女學校に於て教ゆる所の畫は大略臨畫、寫生、投影畫法、及び照鏡畫法等にて足るべし故に今此の種類中如何なる場合に在て前に云ふ所の功用を得べきかに就て說述すべし

凡そ臨畫は臨本を寫出し其寫す所のもの臨本と毫厘を差へざるを主とするを以て畫者の意を用ると自然精微を極むるに至る此際自ら粗漏の性を脫し綿密の性を起し來るべし而して一線一點をも過たざらんと欲せば其形狀に就て一々熟視して發す所あるべからず此に於てか大に視察の力を銳敏ならしむるや必せり夫れ吾人が常に見る所の諸物中謂ふ可からざる風致を存するものあり然れ共學ばざるの眼を以て之に臨めば看て而して看る能はざるなり故を以て風致なるものは之を學び得しものゝ特有するものと云ふも可なり今其風致なるものを分解すれば曰く形狀曰く彩色曰く配置の三に過ぎず而して形は線を以て界するに由り線自ら亦風致を有す畫は則ち諸種の線を以て諸物の形象を平面の上に配置し或は之れに彩色を施す等の術にして一線一色悉く風致を存せずんばあらず故に臨本を撰び或は之れを教授するに當り最も此邊に注意するを以て之れを學ぶものも亦畫術と共に彼の風致を研修するを得るや固より論なきなり其他投影畫法を學んで想像の力を培養し照鏡畫法によりて物體自然の形狀を誤まらざる等此れ皆間接無形の功用にして此間又手臂の運用をして自在ならしむるに至る更に又直接の功用を陳ふれば文章と言語とを以て尙ほ解し難きに當り圖畫を用ひて之れを輔くると及後來の事業に便にすると等となす例は米國の某女學校生徒の用ゆる衣服は其色何其形何と言へば之れを聽くもの必ず其談話に就て一の想像を生すべし其想像に依て各衣服の圖を作くれば其圖は必ず皆互に趣きを相異にし大に實物と同じきと能はざるべし然るに一度其圖を採り之を揭示し而して之れを說明すれば容易にして且つ明了に會得するや必定ならん

特に學問を爲すの人にして理學を修むるものゝ如きにハ畫學最も必要多しとす例へば天文の現象に於ける金石の結晶に於ける動植物の解剖に於ける等之れ皆圖畫の力に依賴して之れが研究を爲せば其便と其不便とに於て如何ぞや特に又女流にあつては手腕及び手指を用ゆるの業務頗る多し彼の衣服なり裁縫なり織物なり編物なり凡て手指を用ゆる百般の事業を取るに當り曾て自ら修むる所の圖畫を應用し一旦其雛形を製し豫め其成果を計畫し而して後ち着手すれば成工の後意外の物を得るが如き歎あらざるなり以上述ぶる所は普通學の一に於て圖畫を學び直接間接に得る所の功用の大意のみ

是れより第二則ち圖畫科の教場に入り學習前後の注意を說くべし教室に入り第一に謹しむ可きは靜肅なり凡そ畫を學ぶものは多く手と眼とを用ひ耳と口とは其間殆ど用なきが如し故に他人の談話其他凡ての音響は自ら耳底に達すべく又自ら畫き且つ語るを得べし之れ教師の管理に關すべしと雖も又自ら謹愼するに非ずんば遂に隣席と相話し教室喧噪を極め殆ど制止する能はざるに至る其進步を妨ぐる實に是れより甚しきハなし學ぶもの豈此に注意せずして可ならんや已に坐に登り筆を執るに當ては身體を眞直になすべし若し其れ體を屈め臂を机上に置くが如きは頗る衛生に害あるのみならず眼目の臨本及び畫紙に接近するを以て視力全面に及ばす爲に大に勢を誤ると尠からざればなり

畫を學ばんとするものハ必ず先づ次ぎに記する處の物品を用意し教場に携帶すべしこれを分つて線圖要品及び筆畫要品の二となす

甲、筆畫要品

○鉛筆堅柔○畫紙○小刀○彈性脂

乙、線圖要品

○製圖器○定木三邊板（45° 60°）二○尺曲尺○鉛筆HH、○畫紙○彈性脂

漸次技術の進步に從ひて種々高尙なる要品も入用なりと雖も初學に在ては前記のものを以て事足るべし

筆畫に用ゆる鉛筆は稍々尖銳になし漸く削盡して其長後筋に達せざるに至れば筆挾を以て其長さを補ふべし

執筆は大指中指及び食指を以て下端を執るべし

運筆の際線の方向に從て畫紙を回轉すべからず若し屢此の如くなせば線を畫くこと只一二の方向にのみ慣れ他の方向に向かつては毫も熟達せざればなり而れども畫紙を其儘にして只だ之を前後左右に動かすは更に害ある事なきのみならず却て又運筆に便を與ふべし例へば左より右に至るの線を描くには畫紙を稍左方に運ばし上方より下方に至るの線は畫紙を稍前の方に出し置くが如し之は少かも不都合なき事なり

已に紙筆を用意し一旦筆を下せば假令へ誤寫する所ありと雖も之を他の紙に改作するを禁ずべし若し屢々改寫する時は爲めに粗漏の弊を引起し來たり遂に正しく諸形を寫出し能はざるに至るものなり

坐定り要品も亦已に具備すれば此に於て始めて臨畫をなすを得べし由て是れより第三即ち臨畫の順序に說及すべし

臨本は教師の撰定に任せ必ず正面に揭ぐべし若し然らずして之れを側らに置く時は大に其形狀を視誤り成畫の後始めて其誤謬を發見する等のこと尠しとせず此の故に吾人は常に諸物を見るに多は正對の位置に於てす故に正面に掛け之れと相對すれば形を誤ると甚だ少なきのみならず且つ其全面を通觀するを得べきなり

畫紙の大小形狀は略ぼ臨本と同一にすべし然れ共臨本極めて小なれば稍大きくして決して縮小すると有べからず

已に臨本の位置畫紙の大小を定むれば之れを斜面の方板上に舖くべし而して未だ筆を下さゞるに當り先づ臨本を熟視し最初其位置を了知して畫の大勢を誤らざるとに最も注意せざる可からず

位置を熟知するの後稍堅剛なる鉛筆を執り全面の位置即ち左右上下の空所、畫中物體の傾斜等を示すに單に點或ハ直線を以てすべし若し然らずして直に筆を上端より下す時は大に全體の形勢を誤り遂に紙中に收むる能はずして殆ど救ふ可からざ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るに至るの歎なきを保せさるなり全體の位置已に定まらば形似に注意すべし形似とは臨本の諸形を轉寫し來て一點一線の差を生ぜざるを云ふ而して之を寫すの順序は先づ鉛筆を取り極めて淡墨を用ひ適意に筆を下し假に一部を畫き終る毎に之れと相隔り其形似如何を臨本に正し苟も一少部と雖も誤りある時は之に改正を加ふべし然れ共再三同所に彈性脂を用ゆれば甚紙面を害するを以て數線錯雜を極め正誤の兩線を認知する能はざるに非れば彈性脂を用ゆべからず然り而して輪廓全くなるに至り彈性脂を以て一同に揩拭し過誤不用に屬するの線及び汚染の各所を清浄し僅に必要の線をのみ殘すこと隂然目に入るを以て度となし左邊の上部より畫き始めて右の下端に畫き終るを常法となす尙其他擦淡用筆等に關し言はんと欲するもの尠からずと雖も以上陳ぶる所或は以て初學者の一助となすを得れば何の幸かこれに若かん

他日更らに圖畫の女流に適するヿを美術上より說かんと欲す幸に繁問の煩きを厭ふ勿かれ

●繪畫講話　一節

八木乘辰

繪畫の効甚だ廣く且大なり外ハ堂宇屏障漆器陶器に畫き金石竹木等に彫り內ハ視を精しくし思想を深くし意匠を巧ならしむ蓋し本邦の繪事上世に創ると雖も草木の花葉蔓艸雲霞の類にして人物鳥獸等甚だ稀なり中世百濟支那の畫本邦に傳り繪畫大に開け其技に巧なるもの續々輩出し別に本邦畫流の一大家を起し終に光榮を海外に博し彼の各國に於て日本固有の物となすに至れり然るに本邦に於てハ其道漸く衰へ古法殆ど湮滅せんと欲するに至れり其因て來る所ろ時勢の然らしむるものと雖も近世に至て一ハ支那南宗の一流（文人畫と稱するもの）大に流行し甚だしきに至てハ芋に似たる石怒に類する蘭を畫き落款の書式も辨知せず漫に自ら文人畫家と稱し風流とか風雅とかの名を藉て其技を售り世間の人亦誤て高尙の畫と認て之を愛玩す隨て陶器漆器等の畫も自然時流に走り古法遂よ本邦に衰へ海外に榮譽を得るに至る抑も畫ハ形在て而後諸法講ずべし今試に月を畫て指さし問も誰か之を鄙といわんや然れども其光榮を海外に博するものハ只に形ちの似たるのみならず筆墨の妙氣運生動人をして嘆賞せしむるよ至ればなり加之畫ハ文字にても言語にても盡しかたきものを盡さしむるものにて文字にてハ花の紅白ハ紅白とかき鳥の飛ハ飛と謂ふに止り花の美麗鳥の飛鳴人の肥瘠喜怒哀樂山水四時の變移畫に非されば盡す能ハず又久敷別れし友世になき人などの遺書を讀て既往を思ひ起すより共に遊び同く談せし景狀を畫に見る時ハ過去の情胸間に生じ愛慕自から禁ず可からざるに至る幼稚の時橋辨慶や大江山征伐の繪を見て成人の後目を閉て思起せば忽ち太坊主が鉢卷して七つ道具を脊負十二三歲の稚子髷童子が下駄ばきにて小太刀と大薙刀にて鬪を見る又大江山の事を思ねば源賴光渡邊綱坂田金時など山伏裝束にて現出すかくの如く幾百年前見ず知らざる人にても其心情迄思想し得べし又意匠の巧を娶するものハ總て其色其形肖たりと雖も意匠の巧拙に依り畫に死活を來し看者の感情深淺に關す今茲に一例を擧れば一日谷文晁の門人相集て翁の畫才を試みんとて秋の七草の畫を寄合畫に作し全紙餘白を留めず殆ど筆を下すべき地なからしめ最後に翁に筆を染むる事を乞ひしよ翁直に大平筆を把り紙面の中央に淡墨を塗抹すると見へしが忽然滿月露畑の中に現し野花秋草皆潤ひ一段の爽氣人を壓するの致あり滿坐の人意匠の外よ出るに驚嘆す（東洋繪畫叢誌第五集）意匠の如きハ獨り繪畫のみに非す學術上に於ても事を處する間に於ても忽且に付すべからざるなり

●叢話

○「はづかし」と云ふ事

自から反みて疚しからずば千万人と云へども吾れ往かんと云ふ古語あり之は人間苟くも自身の心にはづかしと思ふヿのあらんには靑天白日の間だにも身をせゞくめ足を踏あしにして歩む如き心地も致すヿなれ若しも自分の心中に何の愧づる所も無くんば好し千万人の軍兵が潮の湧くが如く陣取つて在らんとも吾は毫も恐るゝヿなく其所に進み往かんと申す義にて古へより眞に立派なる道德家の口つゝけに述ぶる所のものなり、それゆへ此の金言より推して申さんときは何人も少さか心にはづかしと思ふ念なく心中常に靑天の如く赫々たる白日がいつも胸の上に懸り居るように致したきヿなるが、吾人は之に相違し凡そ優美淑德の佳人には何卒はづかしと思ふ樣姿の少さかづゝは在たきものと云ふ一種異樣の考を相述たしと

思へり但し茲に所云る「はづかし」とは實際何ようかの罪を侵し之が爲めに心中に愧かれしと思ふ如きものを云ふにあらず只だ唯だ心の甚れだ優しくして万事に少と乙女らしき心持のするより知らず識らず事に臨んではづかしがる樣姿の出で來る如きをバ云ふあり、と申して人中へ立ち出で開化相應の交際を爲す今日に當り他の紳士が一言のお世辭を言へば乍ちモヂ〳〵として只だ頭を下げ玉はんとが所云る吾人の望むはづかしみには非ず歡樂を主もとする宴會に臨み主人が心膽を練つたる洋食のテーブルに打向ひ乍らハンケチを口に當てヽチホヽと笑らひボーイが度々入れかゆる御馳走を一々點頭をしては只だにらんで居らるヽ斗り人前に食事をするがはづかれしと思れるヽと是れ亦た所云る吾人の望むはづかしみに非ず大凡そ正當に大膽に爲すべき時に當つて徒らに引けを取り昔し娘を箱の中に入れ妻を閨門の奥に閉ちこめたる女大學時代の婦人方の如く空謙遜を爲さるヽことが當今の女德に必要なりと云ふ彼の所云るはづかしみには非ざる也、故に當今の婦人方は事に臨んでは人の前に立つて堂々たる雄辯をも奮れるべし數多の客人を取扱つて當夜の主人公と爲り宴會第一の立役と爲らるヽも亦た今日に相應しきとなり吾人は此のような

る事に對して諸君がおはずかしがらるヽをバ決して希ふものにはあらずと云へども總じて女らしきとに付て一種の言ふ可らざる軟微の心持を具へ時にパット紅葉を散して容貌をそむけらるヽ如き風情のあらんとをバ甚だ尊とむべき女德の一つありと見認むるものあり。例へば朝たに起きて人の未だ知らざる前に先づ髮を梳り衣服を調へ男子もしくは家内の人にだも己れが寢亂れたる樣姿を示さゞるとを覺悟するか、又は假令ひ親愛せらるヽ父もしくは多年の交りを爲したる夫の如き人に對しても己れが皮膚をバ決して見せまじと心得炎天むすが如く家族一同に片ぬぎするほどの時にも獨り遠慮して扇子を弄し少さヽの軟よ風に漸やく心斗りの涼を納るヽが如き眞に些細極微の事なれども其取なしのうちに一種言ひ盡じがたき優美の情を凝めて其の心得方の甚はだ女らしきとを示すものは即ち吾人が今の婦人方に備れらんとを切望するところのはづかしの情あるものなり。

然るに近來の女生徒方及び生物識に開化走りたる女の輩らには其行儀作法其の樣姿取なし殆んど男子と同一にて時には男か女かを判別しがたき程の事もあるなり。先づ袴を穿ち靴をはき打ひも打て髮を結び足のさばき活潑にて肩に空氣を動搖

し音吐しはがれて太く議論堂々として聲はなはだ高し、此等は先づ取除けの女性なりと致しても夜寢るとき寢衣の儘ま人と話しを爲て平氣なる方もあり朝晩くまで眠りて不行儀千萬の樣子を人に見らるゝを心配せざる方もあり胸先を開けて乳房を出し何にとも思し召さゞる方もあれば甚しきは風呂より上り素體にて突立ち大聲にて話を爲さる方もあり客の前に於て下がゝりたる事を平氣にて申さるゝ方もあれば私は近來子宮病でなど打あけらるゝ方もあり特に卑しむべきは客に參つで應接の濟むや否や直ちにハヾカリを借用するとを頓着せざる如き而して、、に入らざる前より紙を取出でゝ片手に之を持參せらるゝ如き吾等如き神經家には見る斗りにて殆んど嘔つく如く思はるゝものあり或は片はだ脫いでお化粧を仕て鏡に向ひ乍ら夫に見らるゝをも顧みざる如き又は髮結に髮を結はせ乍ら之と談話して樂しみとする如き凡そ此類の細かなるとにまで立入つて一々に申すときは中々に得て盡すべからざるほどに多きとなるが而も今の婦人女子にして此等の不行儀を爲し乍ら頓と之をはづるの模樣なきもの甚だ少からざるが如し眞に歎息の極にあらずや、吾人は固より當今の婦女子が何卒千萬人と云へども我れ往かんと云へる勇氣を所持し玉はんように祈る者と雖ども左りとも亦た斯る女らしからぬ不行儀に對しては甚だしく御はづかしがり玉はんとを切望して止まざるなり。

昔し漢の李夫人は無雙の美女にて武帝の寵愛亦た比類なかりしが一旦病に臥して久しく起き出でざりしとき帝自から幸きし玉ふに夫人更に衾を被りて謝して曰ふ妾久しく病にかゝりて形替り色衰へたりとて竟に見へざりしと云ふ此の事少しく議するところ無きにはあらざれども當時夫人の情を察するに一種の愛すべきものありと云ふべし、又た山陽が烈女として傳したる彼の藤女の如き姦妾の君側を汚がすを憤ほり國の爲に志を決して遂に殿中に於て之を斬りたるが後本領に送られて刑に處せらるゝとき「信濃なる山路の雪と諸共に」消へ果つる命を惜しまず殆んど大丈夫の如く泰然として刄を蒙りたる程の義膽ありたるに終に臨んで暫時の猶豫を乞ふ其故を問はれて少しく顏ばせを赤くし此頃身に不淨あれば後にまで恥を遺さんとの心やらるればとて靜かに厠に登つて腰より下の服を縫ひたりと云ふ此期に至つて尙ほ如此き心得あり眞によく女らしき美德を失はざるものと云ふべき也、故に吾人は今の婦女諸君が假令ひ李夫人の如く美麗にては在らずとも必

ず膝女の如く勇壯活潑よく義に勇まれんとを心に祈願するものありと雖ども之と同時に亦願くは此等の婦人の如く一種のはづかしみを失はず常に女らしき行儀覺悟を失はざらんとを特に切望して止まざるもの也。

○小野寺十内より妻へ送れる手紙

赤穗の義士十内の妻の賢婦たりしと及び夫婦の間だの睦まじかりしとは前の號の佳傳欄内に少しく記し置たる所あるが此頃友人宮部君の許より十内が妻へ送れる文の今に遺れるもの丶寫し數多を示されたるうち復讐の後に之に送りたるものを抄き書して左にかゝぐ

寺井迄ひそひそかにつうじを得て一筆のことしをきゝまいらせ候古主のかたきうちとり本望を達しうれしさ申もことばなく候其元へも廿日廿一日頃にきこえ可申同じ心に歡とそもじ候其後おひ〳〵に取々の沙汰にて聞及申され候はん○○も正月始に着き候半と風のたよりにきゝ候まゝ是にて其頃迄の噂たしかに聞てうれしかるべきとぞんじ候。(中略)

幸右衛門事成程けなげに働き金右衛門源吾も同じ事にて候大抵の事は聞へても面々のかせぎは聞へ申まじく候人の事は云ふに及ばぬ事親子の事さぞ聞まほしくも思ひ賜ふへしとすもしかひておらまし申入まいらせ候十四日の日暮に内藏助殿と貳人かごにのりてやどを出立堀部彌兵衞方へ行て九ッ頃迄物くひ酒のみてかたりて夫より林町と申所堀部安兵衞宿へ行爰にて勢揃ひして七ッ過に打立て敵の方へおしかけ候其間の道十二三町ある所にてきのふふりたる雪のうへにあかつきの霜おきてこほりて足もともよく火あかり世間を憚かりててうちんもたいまつもともさねども有明の月さへてみちもまどうへくもなくて敵の屋敷の辻までおしこめ爰より東西へ廿三人つゝ二手に分れて取かけ東表長屋にはしごをかけて屋根より入てみ候親子一方へはむかはねことにて我等は西へかゝり又幸右衛門は東へ向ひ候源吾幸右衞門其外二三人かれこれ四五人一度に屋根を一番にのりやねの上より飛をりさまに高聲に名乘てすぐに玄關へかゝり戸を蹴破おし込番人三人ひとつまにねてゐたるが起て立向ふ一人を幸右衛門左の股を切てきりふせすぐに奥へ切入候其處ろに弓立あらべてあるを幸右衛門奥へ切り入りさまに弓のつるをはら〳〵と切拂ひて返り申是はかねて敵のかたに弓はやりているものおほきと聞候ゆへ定めて内外ともに弓にてふせき可申まゝ其心得すべしと各々内々いひあはせたる故にかたき何方よりかおき出て後ろよりかいる

べきと心付てつるを切はなしてとをりたるらんとよく心のつきたりと手輕き事ながら其砌り人々かんじ候是ほどの間を合せ候事親心の嬉しさそもじもともに歡申さるべく候金右衛門は十文字を能つかふ故に手ごろなるを持て廣場にて勝負して多勢をあしらへとて屋の内へ切入る人數にてはなく新門とて小門の有を守せ置候あんの如く爰に出あふものをつきふせしよし源吾は太大刀とて長刀のやうなる太刀を持下に紅の兩めんの小袖きて上に兩めんのくろきひろ袖の小袖を着し出立わきていさぎよくみへ候是も當の敵をうち候わかきものどもぶん／＼のはたらきしておなじく本意を遂申こと扨／＼うれしきこと推もしあるへく候ともに歡び賜へかし扨わかきものと年寄あらそうことにもあらず若きものを指圖して老人は只守りをよくすべし敵の家の内へおし入り人數一人もいきて出べからねば皆同じ志ざしなり折そへもまじおとりもなしに打立まへに互に神文を書申ほどの事故西の手は大石主税をともないかいぞへには忠左衛門と我ら參り候此手はかけやを以て三村次郎左衛門三ッ四ッ扉をたゝきて打破りどつと押込み直に上野殿隱居の玄關へ切入候其勢はいかなる天魔鬼神もおもてを向ふ可らずと思はれ候押入て門の右の方の長屋の前にて二人出合たる男先へ出しを我等二鎗にてつきころしおどより出たるを間喜兵衛つきふせ候喜兵衛は門を守り我等は北の方うら口へ廻り隣の土屋主税殿の衆垣ごしにやしきの内を守りて居られ候こなたより言葉をかけ其方を守り出あふもの二所にて二人つきふせ候一人は片岡源五衛門見ていて十内どの遊ばしたりとほめ候一人は大石瀬左衛門見ていてその男のたをれさまに念佛申たる迄きゝ候三人ながらしやうこのあるにて老人の罪つくりとや申べきみな／＼鎗にての事なれば刀には手もかけ不申候。（中略）

日永／＼するわざもなくて心の儘にねつをきつすきのひる酒も寐酒もたへて十七人のとうし夜晝こしかたをかたり馳走人衆も心易きあいさつにてさびしくもなく今日迄に五十日暮し候れいの歌よみてきかすれば人々袖しほりかんじ入り候いかい事よみすていゝ何とぞあるべく候この歌にてあきらめいへかし。

まよわじな子とゝもにゆくのちの世は
　　心のやみか春の夜のつき

死ぬべききはなればふるさともわすられんかと思ひもめさるべきが此歌此頃思ひ得候まゝ申入候ぜんぶにいろ／＼春のや

さいを出されたるをみて
武藏の丶雪間もみえずふるさとの
いもがかきねのくさも丶ゆらん
越中守樣御大家にて御人多ければ歌人もあるときこへて丶安事き丶つたへてくどく歌尋申され候人も有にて候歌の道の名迄辱に逢て恥かしくおかしくも覺候慶安老へ此よし傳へらるべし。

ひつじの二月三日　十内

おたんどの
もとへ

○子供の育て草

問。子供が何たる元因もなくて追々に瘠せ衰ろへ行くとあり斯るときは何如にいたさば宜しかるべきや

答。斯るときは強き肉汁(牛肉を煮たる汁の濃きもの)をコップ半杯程づ丶四時間目に灌腸すべし尤も其比ろ下痢の恐れあらバ此の治療法はよろしからず何かの他の方法を盡すべきなれども夫にても無効ならば即ハち最良の生の牛肉を少しづ丶之に與ふるを宜しとす

問。然し一躰ひ弱き躰の子供にて始終の處ろを掛念すべきようあるものは何如にして之を丈夫にいたし得べく候や

答。之は先づ普通の衞生法を行ハせて成るべく身躰を大切にするを第一とするは勿論のことなるが其外一つの秘方とも云ふべきは即ハち土地を變へさするとあり女博士ブラックウトドの言に年若の娘がもしも躰餘り弱くならば之を農家に預け置くべし牛乳は新らしく丶パンは粗末、朝は早く起き、一日定りある嚴密の學課なく丶時に田畠に出で丶遊び走る、斯すれハ乍ちにして全快して反つて大に丈夫となるべしとあるが之れ眞に至當の論あり故に子供の介弱きものは暫時場所を變へて外の土地へ遊バすべし乍ちに其効能あらん。次に有効の法は鐵チンキ又は鱈肝油の如きものを之に飲ますることあり

問。然らば之を先頃流行の海水浴などに連れて參るは宜しかるべく候や後の爲め伺ひ置たく候

答。不都合は之れ無けれども子供を海水に入れて大人同樣に浴せしむるは甚だ惡しきとに候それよりも海濱につれ行いてスポンヂに海水をひたし之れにて其脊中又は腰を拭ひ洗ふが反つて宜しかるべく尙は亦た海水より吹送る風の氣を之に呼吸せしむるが何よりの益あるべし

問。子供は譯を申聞かせても分らぬ者故子供へは藥を飲ます

時などにはほと〳〵難澁いたし候何か善き工夫は之れなきものに候や

答。致し方なければ子供を膝の上にアホノケなりに仰さへ其兩手を持ち又鼻をつまみ扨て西洋のさじ(スプーン)に藥を入て喉へ落とすべし必らず止を得ずして飲み込み申すべきなり但し之は餘り殘酷らしき取扱方のように思れるゝ人も之れ有り候半が左れバとて藥を飲まさで之を殺すよりは如何ほどに其子への慈悲なるか固より明白の事にて候半

問。子供がスヤ〳〵と眠り居るときにても藥を飲ます時刻と相成らば矢張り之を起して服藥せしむべく候や餘り可愛そうとも相考へ候とも有之候也

答。さよう何か特別の藥あらば兎も角凡そ大抵の藥あらば子供の眠りたるを覺ますは宜しからず此のスヤ〳〵と眠り居るは即ハち一種の藥にて躰の爲めに餘程の効あるものゆへわざ〳〵之を起すには及バず起たるのちに飲ませたるにて十分に候半と存じ候

此外尚ほいろ〳〵申たきとあり追々とお問に對して子供の育て方を相述ぶべく今回は先ず之にて止め申したく候

"Who takes the Children on his Knee,
And winds their curls about his hand."—Tennyson.

● 佳傳

○小妹、兄の命を請ふ事　(其二)

合衆國の大統領とは言ふも恐こけれども我國にて　天皇陛下と申し奉まつるが如し三十餘州の政を惣括して威權最上なる方にてあれば年若き娘子等が突然として之に面會するなんど例し少なきことと云ふべし然れど兄の一命を氣遣つて家を脫け出でたる少妹ブロッソムは只だ同胞の危急に心せかれて直様ワシントン府の官宅ホワイトハウスに至り卒爾に戸を叩いて大統領の居間へ通れり、此時リンコルン氏は朝たの業務を理めんとて常の如く机に向ひ今やう〳〵大切の書類に手を着けられたる際なりしが之を見て最と喜バしく最と樂し氣なる。聲音にて

乙女よ斯く早く何事のありて來り玉へる

と問れたるにブロッソムは吃り乍ら

あなた、ベンニーの生命を、どうぞ

と答へたり

ベンニー、ベンニーとは誰の事なりや

私の兄で….番を怠りまして殺ろされます所で….

ナー、ソウ、覺へて居ます

と云ひ乍ら前なる書類を繰り反へし
われは實に大變な怠りで其が爲め幾千人の人命を失ふとであつたかも知れないです
然し私の父も申しましたベンニーは二人前の仕事を爲まして…そしてあの夜はゼムミーの番で御坐いまして…ベンニーは自分の事を構ひませんものですから…そして大層つかれて居りましたから
此處へお出で、何ごとにやどうも分らない
と言ひつゝ巳が傍に招き優しくも手を彼が肩に置て慰さめらる此時ブロッソムは身片田舍の賤の女にして堂々たる此國の大統領に近づき胸といろきて暫しは物も得言ハざりしが直ちに心を取直して彼の携さへ來れる手紙を出し之に捧げたりリンコルン氏は受取つて細かに通讀したるが直ちに鉛筆を取つて數句の文を書付けリンを鳴らして舍人を召び直樣之を發せよ大急ぎなりと命じ付けて扨て靜かに少女に向ひ
乙女之れより家に歸つて父に申さるべし斯る立派なる子供を刑に處するをすら國の律法なれバとて少さかも悲みとせさると感心の至りとは思へども、アブラハム、リンコルンは此樣なる尊とむべき人の生命を失ハするに忍びず此義を汝の父に傳へて下され、然し之より直ぐに歸らるゝか又は翌日まで待つて兄もろともに恙なく歸らるべし
と言ハるゝブロッソムは涙にむせびて感謝しつゝ立ち歸りたるが天の惠みの優かなるを誰しも有難しと思ハぬはあらざるべし
然るに此の翌日肩に燦爛たる軍服のかざりを着け威貌いかめしき一人の士官その少妹と共に大統領の官宅に參り其が私室に案内せられて物語りける此時リンコルン氏謹んで申さるゝよう病んだる友人の荷物を擔ひ毫も怨む所なく刑を受けんとするの兵卒は其國の爲めに眞に價あるものなりと蓋し此日急かに位を進められて士官と成されたるならん、斯て兄妹相伴つて家に歸るときミルシーボーの停車場には村民群集してベンニーの恙がなかりしを祝賀し老父は之に抱きついて神は贊美べき哉との一言のみを發したりける

○チッケル夫人の傳

チッケル夫人とは元の名をカーコッド孃と云ふ瑞西の或傳道師の娘なり幼なき比より才色共にすぐれたりしかば彼のギッボンと云ひて後には歷史家として世に名を轟ろかしたる少年と知己になりて嘗ては彼の約束をも爲したるが破談となり

ぬ、斯て母もろともゼチパに移つて女子の敎育に從事し母の失せたるときは巴里に行いて或る家の子に羅甸語を敎授したるが此際遂にチッケル氏と結縁さるゝこととなりぬ。當時チッケル氏は或る銀行の役員にして資產もとより豐かならねば數年の間だは止むを得ず婚姻の事をも延引したるほどなり然るに夫人は功業を立つることを務るの思ひ甚だ强よく事につけ夫をすゝめて之を勵ましければチッケル氏も亦た之に促がされて追々に活潑の運動を爲さるゝのみか元來其の理財の事に長じたる趣をひく〳〵に世に知られたれば一千七百七十六年遂に政府に出でゝ出納卿と爲るに至られたり

夫人は此時より只管らに夫を助けて世の利益を起さんとに注意し始終心して人の害となるべき者を發見して之が改良の事業を夫に乞はんとしたり左れば先づ當時の大弊と爲り居たる富講の制に付て夫の心を惹き起し大に之を制せしめ次に巴里の牢獄及び病院の改良につきて一方ならぬ盡力をば爲けり傳へ云ふ此時ラウトレックの伯は二十八年間ハムの城中に押し込められて殆んど人間ならぬ如く取扱はれたりと夫人之を聞ていたましさに忍びず直ちに之を見舞ひ强ひて之に面會し政府に乞ふて之を他の更に都合よろしき場所に移させ多くの自由を與へらるゝことに取斗らひ得たりとなり、然れど夫人の仁惠は啻に單なる一人の上にのみ行はるゝに非ず當時巴里の病院には資本金の用ひ方宜しきを得ず患者の取扱ひも其法を得ざる多かりければ夫人は專ら之が改良に盡力し尙ほ多くの金を寄附して之が入用に充てられたり左れば今日に至るまでチッケル病院と云へる名前の存すると即はち夫人の德の現に世に遺るものと云ふべし

夫人がチッケル氏に於ける內助は一と方ならず特に其間だ柄甚だ親密なるうちに嚴密の禮儀ありければ其比の宣敎師方もほと〳〵之を感じて例しなきものと爲したるほどなりされば夫人は內外の事について夫を助けられたると多かりつれど其の夫を愛せらるゝの心亦た甚だ强よきが故に世上外樣の人をして斯る內助のありと云へるとを知らせず只だ唯だ夫の名を好かれとのみ祈られたるとと見へたり此故に誰あつて夫人がチッケル氏に於ける非常の助けの程を承知し得べきものあらざりしにチッケル氏は亦た明々地に之を人に告げて其細君の德の甚だ高きとを風聽ありければ扨ては之よりしてぞチッケル夫人の名世に明かに知らるゝこととなりぬ、チッケル氏は千七百八十一年其職を退き有名のコムピートレンヂウを著はさ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れたるとき此書の終末に左の如き語を記るし置かる
陛下の御徳に寄依して行ひ奉りたる數多の慈善の事業を斯の如く列叙いたしたる時に當り茲に陛下の御前に一人の婦人の事を記し奉らんとの許を得たく希願す但し臣は此の婦人の姓名を申さず但だ斯く申述ぶべし此人數多の徳を備へ臣を補助して遂に陛下の寵恩に成れる事業を行ひ奉るとを得せしめたり、臣は茲に此の婦人の名を上聞せず然れども陛下は困苦難澁の民の隱るゝ所に於て此の婦人の名の必らず現はに唱へらるゝとを知ろし召すべし、凡そ出納の職を奉ずる臣の如きものに斯の如き補助を爲し與るゝの人を得たるとは臣が無上の幸ありき臣は往々大を以て小を無みし公衆の事を以て一私人の事を後にするの勢を免るゝ能はず此際臣が職務を感ずると同樣の思を以て其職務を思ふの人ありて能く此の一私人一小事に注意し慈善憫愍をして能く强剛頑固の力に折衷するを得せしめたると臣が無上の幸也
夫人は元と文學を好みたればチッケル氏に適くの後ち著述を以て餘暇の業と爲さんと志ざされたれど良人の不同意に由つて快ろよく之を斷念されたれども天然の好む所ろ自からに其道を求めて發出し夫人の著作として世に殘るものも少からず然れど多くは慈善の事に關はるものにて中にも病院建築記錄など云へる名高きものもあり其外、假葬論、離婚考、雜集なども亦た世に知られたるものあり、然れど夫人に欝積したる文情は其の愛娘の上に於て現はれたるものか夫人が一女チッケル孃即はち後にマダム、デ、スタルと申し第一世ナポレヲンをして恐怖せしめ一枝の筆を以て歐洲を席卷したる此大豪傑に反對したる女學者第一等の文人は即はち夫人に由て生れ夫人に由て育てられたるものなり、左れば夫人は妻として能く夫を助け母として能く其子を敎へ良人愛兒をして二つながら天下に名を擧げしめながら夫人の名は反つて其の後面にひそみ居ると是れ亦た尤も夫人に敬服すべき所なるべし

● 小説

○薔薇の香

第十六回　(友情の生死)　月の舍　しのぶ

茲に園池庭樹を左に見て向ふに千古に秀づる富岳を望み閑談すでに數刻に渡れると覺えたる二人の女秀才あり一人は顏立甚だ艶麗にして花の如し只だ憾むらくは何處となく精神を缺いて之を評すれば眞に美ありと云ふの外一物を具へず衣服は

ちと華美に流れて飾りやゝ多う過るが如くハンケチにも繡を附け指環にも珠を凝めて五分と透いたる處ろなからんとに掛念したるようなり、之に差對ひて最と沈着に見へたるは容貌固より尋常の人に超ゆれど彼の艶麗の美人に對しては中々に比らべ得べきものにあらず特に容體甚はだ瘠せて色蒼味を帯び髪の毛フサ／＼と垂れて風の爲めに漂ようなんど眞に風情ある樣には見ゆれど眼を蔽ひたる目鏡決斷したる口元等に一種高尙の趣むきを示し着物の淡泊なる、取つくろひの眞率、なるに平生の心得を現はしたり、二人は多年の交はり淺からねばにや互ひに遠慮したる樣もなく自由に打語らひたるが

白河さん、それでもマア善つたのチー一時はどうかしらと思つたのよ

本當にいろ／＼と御心配を掛て濟ませんでしたよ私もモウ迚ても此世に存らへようとは思ひませんでしたがチ、ついすら／＼と直ほつて此樣に成つて仕舞ましたよ

どうなすつたのでせう本當に不思議よ私が來てお話しを爲て居ましたときに、何でしたつけ、急に變に成つてよお可笑なとを仰しやつたよ

ホヽ、そんなとが度々ありましたそうで此頃に成つて色々と宅の人が申しますけれども少しも覺へませんで、さぞお笑ひなすつたでせうチー

イヽエ笑うどころでなくつて本に涙をこぼしましたよ、そしてあなた青・青山さんのとを度々仰しやいましたのよ

エ、うろばつかし、何しにそんな事を申しますもので、イクラ神經が狂るひましたときでも平生思はないとを言ひますものですか

ダカラサ、あなたが度々ろの事を仰しやつたからそれであなたが大層あの方の事を思つて居らつしやると思つて涙をこぼして上たのよ、それに今ま御全快なすつてそしてお約束をなすつたのですから、お祝ひ申しますワ

白河は此時息をつめて無言なり波羅は尙ほ呼吸をついで

ろしてイッなさるんですか

なにをですか

お約束も濟んだのですから何時御婚姻があるのですかと申すんです

婚姻、婚姻などは在らしませんよ、私は夫などを持つとの出來るものではないのですから

之は可笑しひじやわ有ませんか青山さんとお約束が濟んで

誰も知らないものはないのに、そんなにお隱しなさるとはないじやお有ませんか

何も隱すんでは御座いません、成程病氣の最中に青山さんが色々と說得なすつて下すつてそして叔父も大層心配して呉れましたし、それにあの時は何う云ふ積りで在りましたかウカ〳〵と心を極めて仕舞ましたのですが、斯う直りましてから能つく考がへて見ますと、迚も私は青山さんと弁らぶべきもので無ひと思ひまして、なんです、此間お手紙を上げてお斷わりを爲て、今では青山さんを矢張り前の樣に朋友と思ひます、イエ朋友よりも兄弟とも思ひますが其外に少しも關係がありませんのです

チヤ、そう、お破んなすつたの、非道いじやお有ませんか、あなた

イヽエ、何にも非道いとは無ひんです、波羅さん、此世の中は愛が第一ではありますが、愛はホーム（一家）を持つものゝみに限るものじやお無ひでせうから、人を不平にしたり不幸にしたり致しまする交際は矢張愛の爲に惡るひのです

そうチー

此頃青山さんにお會ひなすてか

イヽエ一と月ほど前にお目にかゝつた切ですワ、何んですか此頃は亦た前のようにグルーミー（氣鬱）に爲つて困るとお榮さんがお言でしたよ

アーソウ、お榮さんはモウ御卒業なすつたのでせう、そして此頃では御一處に出なさるんですから青山さんも餘程よろしう御座いますよ

本當にお榮さんがあるのでイクラあの方の幸ひだか知れないのチー

そうですとも

● 寄書

○淑女以文會餘響

鳥居忱作

一ッとや。日々に新に。また日々に。婦人の智識の。進みゆく。」

二ッとや。書讀む方便の。小集とて。淑女の寄りあふ。以文會。

三ッとや。優美の遊戲を。まじへつゝ。讀書小集の。面ろや。」

四ッとや。世々の歷史を。繙ときて。名高き淑女を。數へみむ。

五ッとや。伊勢大輔や。HEMANS。大貳三位に。曾大家。

六ッとや。紫式部や。AUSTEN。淸少納言に。宋若昭。

七ッとや。おべて昔の。諸淑女。嫺雅の婦人の。明鑑あり。」
八ッとや。やをら妾も。西洋の。唐土の八洲の。書をみむ。
九ッとや。こゝろをひそめて。文學や。理學や數學。學ばなむ。
十ォとや。友達うちより。うちとけて。優美の遊戯に。樂まむ。」

〇父母干渉論　　本鄕森川町　小林一枝

西洋文明の光一たひ東洋小洞源内に達し爾來人々爭うて自由の空氣を呼吸し上は君民の間たより下は男女の間に至るまて務めて壓制の束縛を脫し干渉の防害を除かんと欲し隨て其面目を改むる者亦た少なからず而して父子の間に至つては殆んと之を顧みる者なく依然舊套脫せさるが如し豈悲からすや父の子に於ける束縛干渉の害多かるへしと雖も其最も著しく其最も速に去らさる可からさる者は目的と結婚の干渉とに在なり目的結婚の干渉固より何の時代を問はず何の社會を論せす必す害あるにあらず人智未た開發せず社會尙ほ幼稚に屬する時は啻に其害なきのみならす却て利するともある可し猶ほ彼の專制政府の野蠻時代に必要なるか如し然れとも社會は活物なり人智は機械的の物躰にあらず時と共に進化して時々刻々其躰面を改むる是を以て昔日利ある者今日亦た其害なしと謂ふ可からず若し其進化するを知らずして之に應するの術を求めずんば是豈に六尺の男子にして兒童の斑衣を着するに異ならんや誰か其愚を笑はさる者あらん目的結婚の干渉の如きも天保時代にはいざ知らず明治の新天地に至りては遠く其時期を過ぎたる者と謂ふ可し予は結婚干渉の利害は之を他日に讓り今少しく目的上予の意見を述へんと欲す予以爲らく人固より能あり不能あり（韓退之の提灯持にはあられとも）其能する所は泰山も高しとするに足らず北海も廣しとするに足らず其能はさる所は秋毫も擧くる能はず輿薪も見る能はず猫は以て門を守る能はず犬は以て鼠を捕ふる能はず或人予を難して曰く能不能は中以下の人にあり上智に至つては決して能不能なし地を易へは皆一なりと亦た誤れるの甚しきと謂ふ可し凡そ事を論するは必す中等社會を標準とせさる可からず如何に步を讓るも中等以下に下らしむ可きも獨り上智を以て標準とすへからず何となれは上智は社會の一小部分にして其大部を占むる者は中等以下にあるを以てなり況んや其立論未た容易に信す可からさるに於ておや若し或人の說の如くならしめば彼の「ルーテル」は能く數百萬の大軍を指揮し銃砲馬蹄の間に敵を破り勝を制すると「ナポレオン」の如きを得る乎又彼の「ナポレオン」は雄辯不屈獨り宗教の眞理を主張し言論辨駁の間に敵を破り勝を制すると「ルーテル」の如きを得る乎三尺の童子と雖とも其然らさるを知る是れ固より天の吾人に與ふる者各々異なるを以てなり若し天の吾に與ふる所を察せす妄に之か干渉をなすは是れ豈に天に背者と謂はさる可けんや天とは何んや天道なり天道とは眞理是なり眞理に背くと其成るなき論を待たず又曰く天の吾に與ふる所の者如何して之を知る可きや之を知るの術亦た難からずやと予答て曰く之を知る難からず其容易きと掌を翻すに異ならず吾か好む所即ち天の吾に與ふる者なり之を詳言すれは吾好む所は吾の能する所なり吾か好まさる所は吾の能くせさる所なり故に好む所は屢々乎として進んで已むなきの想あり好まさる所は忽ち倦怠厭惡の念を生し早晩之を發す是天理に背く所以にあらすや曰く一人にして時に從ふ好惡の變するあり天の吾人に與ふる者二樣ある可からずと曰く是れ何ぞ妨けん其好惡を變せしむるは彼の習慣の然らしむる所なり習慣成者其力强大にして時として固有の天性たりとも尙ほ之に勝つ能はさるは復た怪む可からさるの事なり故に西哲曰はずや習慣は第二の天性なりと兎も角も論理上より之を察するも事實上より之を見るも吾が好む所は其能くする所にして惡む所は其能くせさる所なるは到底爭ふ可からさるの事なり俚諺に曰くすきこそ物の上手なれと以て見る可し人或は日はん能不能を擇ぶは大丈夫の爲さゝる所なり精神一到何事不成と是啻に末を見て本を知らさる皮想の見にして予將に此の如き論者を名つけて遠視眼論者と日はんとす精神一到何事不成と古人の金言にして予未た之に向て一擊を試みる能はず然れとも論者一たひ思ひ抑々精神の到ると否とは何に由て起るか其一たひ到りて金石も透ふすの力を有する者は嗜好心の之か先導を爲さずんはあらす此先導なくんは精神も躊躇停滯して後に退くも前に進むとなかる可し若し之を好まさる者に向つて何ぞ之を好まさると責むるか如きは已に醉ふ者に飮を勸め已に飽く者に食を强ゆるに異ならんや殘酷も亦た甚しき哉假令腕力を以て之を脅すも剛者は必す之に從はす却て彼を擊破す可し懦夫は其暴威に恐れ所謂御無理御尤にて暫く意を枉けて之れ從ふも心服するにあらされは手を替へ品を變へて之を免れんとを求め求めを得されば終に死するに至る可し或は又日はん已に習慣は第二の天性たるを知れは一時は之を厭ふも後には必ず之を好むに至る可しと是未た其必然を期す可からずと雖とも暫く一步讓り之れ有りとせんに流に逆ふて溯る者と流に順ふて下る者と其利害得失果して如何そや喋々論を待たすして明なり若し流を下るときは我義務盡さゝる所あるか又流を溯らずんば美果得可からずんば巉岩屹立激流石を飛はすと雖とも吾何ぞ之を避けんや然れとも凡ろ吾人の此社會に出るや吾は履師たる可し汝は代言人たる可しと君は毒庵たる可しと母の胎内にあるときより已に一定の義務を負ふ者にあらず履師たるも代言人たるも毒庵たるも皆一なり獨逸の大家「シルレル」氏曰く人の此世に來るや只た一の「ベスチンムンク」義務或は條約を有す其「ベスチンムンク」とは何ぞや曰く人たる者は皆吾身をして人たらしむ可しと若も其目的にして社會を利し人民に益するとあらば吾人の義務は足れりと謂ふ可し且や天下の廣き美果の多き上は法律經濟より下は農工商に至まて東するも西するも美果ならざるなし時間は凡て黃金なり空氣は皆財寶なり而して或は美果を得る能はず或は千辛萬苦の餘幾多の長月日を費し僅に之に達し達するも未だ其味を知らずして忽ち殪るゝ者あるハ其力足らざればなり言葉を易へて之を言へば强て其

能せざる所を爲せばなり

抑々此宇宙には優勝劣敗なる一大原則ありて自然陶汰と人爲陶汰と常に其間に行はれ生存競爭少時も已まず弱者ハ日々に滅亡し强者日々に繁殖するハ古來學者の夙に知る所なり此生存競爭の地に立ち勝を制せんと欲せば宜しく平易坦直の途を擇び進取して止まず拮据其力を養ハざる可からず嗚呼此廣莊無極なる大海にありて機を取て其方向を定むる豈に輕々に看過す可けんや故に予以爲らく苟くも機を捨てゝ覆没魚腹に葬らるゝの憂あるか又ハ其舟を進むるも暴虎馮河の恐あるにあらずんば何人たりとも其針路を妨げ之が干渉をなし飄搖其行く所を失へしむ可からず

世の干渉論者中にハ彼の千數百年前支那道德の御祖師様の宣ハれたる箕裘有業とか云ふことを擔ぎ出して其子に責むるものあり然れども此の如きハ三思の勞を費やさず一たび首を傾くれば其一文半錢の價値なきを知るに足るべし人若し此干渉家に向て何故に子は父の業を襲ざる可からさるやと問はば彼將に何の言を以て之に答ハんとする乎默々手を擧げよ天保頭（頑固陳腐の腦髓の住する所と知る可し）若又干渉家をして不幸にして紙屑買たらしめば其子如何に天縱の才あり如何なる好運來りて他日有力の政治家となるへき時機あるも彼尚頑然として其子に向て汝は紙屑買の子なり故に汝は紙屑買となる可し政治家となるべからずと曰へる乎彼昏愚と雖ども苟も瘋癲白痴にあらさるよりは恐くは此言を發せさる可し古昔印度埃及に行はれたる「カステン」即ち階級制度又は種族制度の道理に背き社會文明の進歩を害したるは皆人の知る所なり今や我日本は舊日本の迷霧を出てゝ新日本の光明に達せんとするの時にあらすや楷級種族的の臭氣を驅て同權平民的の芳香を嗅かんとするの機にあらすや而して干渉家の所謂箕裘有業なる者は眞症「カステン」にあらさるも之を名つけて類似「カステン」と稱するも予其不可なるを知らさるなり其楷級種族的の養成を媒介し同權平民的の發育を害するや明なり

嗚呼新日本を作爲するの青年輩何ぞ速に之を撲滅せさる

請ふ干渉家諸子一たび內外古今の歴史を繙て之を通覽せよ已れの意を枉け父の業を襲き名を世界に轟したる者幾人かある古來英雄豪傑の大事業をなす者は多くは父の業を執らさる者にあり何となれは人の異なるは猶ほ其面の異なるか如く父の能なる所子亦た必す能なるにあらさるを以てなり干渉論者以て如何となす

●新報

○淑女以文會　去廿九日同會の第一會を開かる同日は貫名練子甫守謹吾岡村増太郎宇川盛三郎鳥居忱益宮祿祐等諸氏の演說あり來會婦人百餘名ありしよし

○高知の姉妹　此度高知より片岡健吉坂本直寛の二長老東京に登り來られ政府に意見書を捧呈せられんとするを諸新聞紙にも見ゆる所なるが之に付き高知教會の姉妹等は特別に祈禱會を開らき熱涙を以て其の成功を天に祈禱さるゝと云ふ

○高知縣尋常中學校女子部　高知縣尋常中學校に於て去月三十日より女子部を設け土佐郡帯屋町舊醫學校を以て其校舍に充て生徒一百名を募り國語、漢文、英語、數學、地理、歴史の科目を以て試驗したる上七十二名の入校を許可せり今本部設立の緣由を略陳せんに元來本縣女子學術の進歩ハ驚くに足るものあり十二三歳の頃已に小學業を卒る者尠からず是等の女子更に進みて學ぶべきハ從來一の女子師範學校あるのみなるが該校には人員と年齢との制限ありて之がため望を達し得ざるのみならず殊に昨年ハ師範學校學制變更のため在來生徒中年齢未足を以て退學を命ぜられし者七十餘名あり孰も學途に彷徨し纔に其學力を維持し以て募集次期年齢の長ずるを待つの景況なるを以て同縣有志者大に之を憂へ高等女學校設立の緊要なるとを主張し終に縣會の可決に由りて該設立の事を建議し裁可を得て今日の盛擧を觀るに至るなり本年十月廿八日官報

○叙任　瓜生繁子ハ東京高等女學校教諭に任ぜられ奏任官四等に叙せられ又文部屬鮫島晉氏ハ同教諭に任ぜられ奏任官五等に叙せられ又平田盛胤、竹村千代子の兩氏も同教諭に任ぜられ奏任官六等に叙せられたり

○景山英女　先頃獄中に於て同囚小林樟雄氏と結婚の約を契りし大坂國事犯者景山英女ハ當時三重縣監獄に在監中なるが入監以來ハ嚴肅に獄則を遵守し毫しも犯す所なきのみならず同監の女囚にして不良の所爲ある者ハ徐かに教諭を加へて之を改悛せしむる事屢々ありて同女の在監以來日尚ほ淺きも女監の囚徒ハ大いに同女の德に感し感化の効鮮なからず或る教誨師は同女ハ縣下女囚の改良に於て模範を垂るゝ事多かるべしと稱賛したりと又此頃ハ自から請ひて裁縫に從事し傍ら讀書に眼を曝し居り少しも平素の氣象を沮喪せず其風采も昔日に異なる事なしと云ふ右に付安濃津なる贄崎町及び藤枝町の各貸坐敷に出稼ぎする藝妓一同ハ其德を聞傳へ互ひに協力一致して日々三絃にて儲けたる收入金の內幾分を積立置き同女の出獄の日を待つて慰勞費に充てんと各樓主に義捐金募集の擧を協議したるに樓主にも大いに贊成し又同地大觀亭開化樓等に抱への藝妓も右兩花街藝妓の奮發を贊成して是亦義捐金日掛積立の事に定めたり今安濃津現在の藝妓を五十人と見做し一日一人に付金壹錢宛積立てると爲すも同女の滿期放免に至る刑期一年六ヶ月に積算せば金二百七十圓の多きを得るに至るべし又北勢四日市の南北兩町及び高砂町の各藝妓等も近日より日掛積立法を以て同女に送るとの協議中なりと聞けり若し之を受取られたれば驚くべきと也

○毛糸の相場　編物の流行せしより殆んど二ヶ年を經たるが之に供給する毛糸の市場に上りしハ昨十九年三月頃の事にて取引頗に增加せし爲め兎角品薄の姿となり價も漸く昂進し一封度二圓十錢の賣行とまで至りし處同年八月頃より綿絲にて摸擬品を製出せしより各地方の販路ハ多く綿絲を增し加ふるに毛糸の輸入も多くなり本毛糸の相場ハ一層不景氣となり今年二月頃には一封度一圓五十錢の安直を現はし之を最初に比すれば六十錢の下落なるが猶六月頃には十五錢方を引下げ目下ハ一圓廿五錢內外なりと又綿絲ハ野州野澤紡績所の製糸にあらざれば適當せざるよしにて最初賣出しの時分ハ一封度八十錢にて昨年十一月には六十錢に下落し本年二月頃より毛糸の下落に連れ共に四十二錢となり當時ハ三十五錢の安直なりしも昨今奥羽地方に綿絲の要用を增したれば少し景氣つき一封四十錢內外まで昇進したりと云ふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

特別廣告

●東京婦人矯風會錄事（明治二十年八月以下）

○八月。暑中本會の諸事殆んど休止に似たり

○同。婦人矯風會勸告文を印刷に附して一千部頒布の手續をなす

○同。當月入會者七名

○九月十四日。議員集會を矢島揖宅に於て開き左の條々を決す

一築地教會の新築費へ寄附金す可き事、二規則書千五百枚幷章書五百枚出板の事、三親睦會を開く事、四徽章を製る事、五本會の學校或は講修所を建設する事

○同月八日。會頭及び書記の寫眞本會の規則及び勸告文と共に米國禁酒會々頭ウイルラルド氏へ向て送る

○本月入會者十名

○十月八日。午後三時より日本橋會堂に於て定期會を開く

廣告

●結婚媒妁所　東京日本橋區檜物町一番地河岸通角

全國何人ニ限ラズ嫁娶養子共媒妁依頼ニ應ズ御來談ヲ乞フ

●女學雜誌社出版書目

○鈴木弘恭君講述○山村亮作君筆記

つれぐ草講議　定價十二錢　郵税四錢　第一號

右は鈴木弘恭君の講義ありたるを山村君の筆記せられたるものにして其解釋の綿密なる一本を机上に備ふる時は五里の霧中を出でゝ天晴朗々たるの天色を見る心地す四方の貴嬢諸子請ふ續々購讀あらん事を

○統計局次長世良太一君序○統計協會議員呉文聰君序

婚姻論　○朝野新聞記者横山雅男君著

○定價一冊三十五錢郵便税十四錢

右は横山君が得意の統計學上より婚姻の定義其外早婚晩婚離婚などすべて婚姻に關係する事物は擧げて殘す所なく議論の確實なる擧例の精密なる世の父母たるものも亦た青年の男女の方々必讀の書なり

船越鼎太郎君著

産婦小兒 攝生法（新著）　一冊十八錢郵税四錢

右は産婦小兒の養生法を平易なる文章にて何方にも分り易き樣認めたる者なれども所論は一々學理に照して實際を鑑み專ら當今の養生法其道を盡さゝるを教へたり故に月經の心得より、妊娠したるか否やを知ると、出産の期日を知る法、妊娠中の養生法、産後の養生法、赤子のとりあつかひ、乳を飲ますの間養生法、母の乳を用ひずして子供を育つる法等ことゞく信切に教へたり世の母たらん人は何卒一冊を座右に置きて最愛の生子を誤りて取扱ひ玉ふやうのことなからんを希ふ

○田口卯吉君結髮沿革附錄○和崎義路君校○巖本善治君跋

○渡邊鼎君著

束髮案内　美製小本八十頁細圖入　定價十五錢郵税四錢也

當今束髮流行の折柄其結び方の不案内の婦人少からず此書は日本婦人に適する束髮二十餘種の結び方を丁寧に教へ一々細圖を附して親切に案内すれば何如なる僻遠の地に在りて束髮の風を知らざる人々も之に依て容易に自ら試るを得べし特に田口卯吉君の論文束髮會の規則其外をも添へたれば結髮改良に志ある人々は宜く一讀あるべし

○鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評

改正增補 文法口授　全一冊 ●一名和文獨案内　定價十八錢　郵税四錢

此書は文章家なる鈴木大人か多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて曩に出版したる所大に諸校の賞用を得たれば何亦今般大人に乞ひ改正增補して古人の和文章數十篇を卷尾に付し或は雅文を俗文に譯し或は漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ぶ人の和文を漢文に譯するにも大に益あるべし且女學校など學ぶ人に於て和文を學ばんとする生徒諸君の爲めには此に過たる良書なかるべし

●右文法口授は學校教科用の書籍に適當也とて發兌后一週日を經ざるに既でに成立學舍女子部及び頌榮女學校並に明治女學校長榮女學等の教科書となりたり

中島湘烟女史著

●善惡之岐

定價五拾錢
繪入美本

新刊

右は兼〻本誌上に揭載仕たる中島俊子君か得意の快筆を以て編まれたる小說あるが此度これを一冊として出板せり編中には中川昇氏が精密なる銅板彫刻の美書を加へ總ふりがな付きにて初學者と雖も容易に讀み得らるべき書なり四方の諸君希くは一本を購て同女史が意想の高きと其健筆を味はれん事を

賣捌所、(銀坐博聞社、原金港堂、)

女學雜誌社

●通信女學第六卷

明治二十年十月廿五日刊行

一本卷文學一斑の部には用言活用の精細なる圖を揭載せり理學一斑には地文學講義の第一回あり其他育兒心得、西洋女禮及び女子生理の部には懷姙の事を解き家內理學には温熱反射の理を顯せり●一冊定價二十錢○全國遞送料無し

巖本善治篇

●木村鐙子小傳

定價十錢
郵稅六錢

右は明治女學校生徒の爲め編輯し朋友知已に博く配布したるものあるがなほ殘餘あるを以て之を有志の人に頒つ書中勝海舟翁の題辭外山正一島田三郎兩君の序あり

東京新橋日吉町八番地

女學雜誌社

明治女學校生徒募集幷びに新築落成廣告

本校漸次隆盛の域に進み從來の校舍非常の狹隘と相成り候に付き今般高燥の地をトし校舍を新築し略ぼ落成を告ぐ依て新入女生徒二十名の入學を許し且寄宿生三十名を募る精細の規則は附て承知あるべし○規則書御望みの御方は新橋日吉町八番地女學雜誌社へ宛て郵券二錢送附あれば直ちに發送すべし

東京麹町區飯田町
三丁目三十二番地

明治女學校

發兌	
九月。	三日 十日 十七日 廿四日
十月。	一日 八日 十五日 廿二日 廿九日
十一月。	五日 十二日 十九日 廿六日
十二月。	三日 十日 十七日 廿四日 三十一日

定價		
一冊。五錢	郵稅。一錢	(但府內無郵稅)
十冊。四十八錢	郵稅。十錢	(同前)
半年分	一圓十七錢	府外は 一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を請する者に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行(廿七字詰)

一回 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8 HIYOSHICHÔ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○東京芝西久保櫻川町萬春堂○東京神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新銻町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○東京本郷四丁目文壽堂○横濱仲吉町角田屋貞○京都四條通小橋へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンポード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥平堂○勢州松坂家里初枝

發行所

東京京橋區日吉町八番地

本局 女學雜誌社

持主兼編輯 巖本善治

印刷 森田豐治

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY